

ライブラリー 通信

LIBRARY NEWS

TOHOKU UNIVERSITY OF ART & DESIGN
LIBRARY NEWS

発行:東北芸術工科大学図書館

tel. 023-627-2044

fax 023-627-2085

mail : library@aga.tuad.ac.jp

平成19年4月8日 No.21

2007. spring

[ぽかぽか桜花号]

芸工大の東・西を拝む

歴史遺産学科 教授 人間田宣夫

研究室の窓からは、柏山の秀峰に抱かれた耕源寺が真正面にみえている。桜寺の通称に違わず、花木が美しい。寺山の通称でよばれる柏山の紅葉交じりの雑木林も、目に優しい。だが、そればかりではない。じいっと、向き合っていると、それらの景色の奥底に、なにかしら、大きなものが横たわっていて、こちらを見守っていてくれるような気になってくる。

そうだ。あの奥には、瀧山大権現がおわした。瀧山から流れ下る川水が、桜田(上・中・下)、粟生田(いまは青田)、小立、元木ほか、山麓の村々を潤したことから、農業を見守る大権現と仰がれるようになった霊山の歴史については、それなりに理解していたつもりだった。でも、その山の霊力が及ぶ直下の桜田の地にくらすことになるとは、想ってもみなかった。実際にくらすことになって、霊力のはたらきを、知識の上だけではなく、感覚の上でも、受け止めることができるようになった気がする。

古代には山方郷が、中世には大山荘が広がっていた。山方とは里方の反対語。山側の地域を指す。大山は文字通り人々が仰ぎ見る偉大な山を指す。いずれにしても、瀧山の勇姿を想い描いたうえで造語だったに違いない。

桜田の地には、瀧山大権現の里宮とも考えられる瀧山神社(桜神社)が祭られている。瀧山の桜には、あの西行が訪れたという記録

さえも残されていた。瀧山川の本流が注ぐ元木の平坦部には、古代の石鳥居(重要文化財)がすえられていて、瀧山信仰の原風景を伝えてくれている。瀧山を仰ぎ見る、この鳥居を出発点にして、人々は大権現のおわす霊山の頂上、ないしは本尊仏の薬師如来がおわす東方瑠璃光浄土の頂上をめざしたのであった。

学食で鳥うどんの汁をすすりながら、なんとなく池の向こうに目をやった。そして、驚いた。夕日が、はるか、月山の山並みの真上にさしかかっているではないか。辺りほとりが黄金色に輝いて、荘厳な雰囲気満たされている。

ふと、思った。阿弥陀さまが西方極楽浄土から山越しにお迎えにいらしたのではないかと。

それもそのはず、月山は阿弥陀さまがおわす霊山であった。その昔、山頂を目指す行者連は、「六根清浄」の神道風にはあらず、「ナムイダンボ」(南無阿弥陀仏)の仏教風の掛け声をあげたという。

そのまた昔、都市平泉の主、秀衡は、無量光院の本尊阿弥陀仏の頭上、そして堂後に聳える霊峰の金鶏山の頂上に、さしかかる夕日を拝んでいた。浄土庭園の池中に浮かぶ小島に端座して、降り注ぐ散華、妙なる音楽と香りに包まれながら、極阿弥陀さまに迎えられる、極楽浄土の池中に咲く蓮華の台座に生まれ変わったような気分、秀衡は満たされて

いた。

その以前、宇治平等院で、関白頼通が夕日を押んだのは、池の対岸に設置された小御所のなかであった。すなわち、池の手前で止まっている。本尊阿弥陀仏頭上の夕日には変わりが無いが、堂後に聳える霊峰の姿は望むべくもない。したがって、秀衡の無量光院の方が、仏教の奥義に合致して、極楽往生の「疑似体験(バーチャル・リアリティ)」の舞台装置として優れていると言わなければならない。すなわち、無量光院を平等院の模倣だとして怪しまない常識には、大いに問題ありと言わなければならない。

このような卓越した景観設計のあり方に着目することがなければ、「平泉—浄土思想を基調とする文化的景観—」を世界文化遺産として推薦する文章をしあげることはできなかった。

瀧山大権現に薬師如来の東方瑠璃光浄土を仰ぎ見た古代・中世の村人の想像力や、西山にさしかかる夕日に阿弥陀如来の極楽浄土を体感した平泉の秀衡の想像力に響きあう想像力のはたらきが、芸工大の景観設計には及ぼされていたのではあるまいか。そのような気がしてならない。東西の霊山を遥かに拝み、近くは耕源寺の柏山を背景に、桜田・青田・元木の集落を前景に位置づけるという卓越した景観設計が、そのような想像力のはたらきが介在することなくして、どうして可能になったといえようか。

古代・中世の村人や平泉の秀衡にも負けない想像力を身につけて、世界に雄飛する機会を模索するのに、これほどに恵まれたキャンパスはない。

新着図書から

『日本の建築と庭―西澤文隆実測図集』

●西澤文隆実測図集刊行会編

中央公論美術出版

『建築と庭 西澤文隆「実測図」集』

●西澤文隆「実測図」集刊行委員会編

建築資料研究社

学生時代の京都建築見学旅行で印象に残った庭がある。築地塀に仕切られた白砂だけの庭に巨大な松が一本、横に枝を延ばして空間を占有していた。「何という単純で、しかし、力強い構成！」確か、記憶ではそのような庭だった。ところが昨年、あれがどこの庭だったか本に当たってみると皆目分らない。大徳寺の本坊か、塔中の真珠庵なのは確かだし、これらの庭について書いている本はたくさんあるにもかかわらず、どこだか分からないのである。

なぜ、このようなことが起こるのか。それは、おそらくこのような理由である。いわゆる庭の本に書いてあるのは、庭の権威が価値ありと認めた庭であり、それ以外のものについては書かれていない。大徳寺に行くと、本坊も塔中も、建築群が連結された複雑な構成を持っていて、それらの建築の周囲やあいだが全て何らかの形で造園されている。そのなかの造形性の高い部分が、庭として本に書かれるのだが、それ以外にも庭はある。それから、ふつう庭とは呼ばないちよつとした空間や繋ぎの空間も、見方によっては重要な庭である。

有名な庭だけが重要でない理由を理解するには、たとえば、実際に訪ねてみれば良い。庭を見るにも順序がある。門をくぐり、前庭を通って玄関から上がる。薄暗い室内を通って目指す庭に通される。暗から明、閉鎖的空間から開放的空間へ、訪問者としてだけでもこうした経験を味わうわけであり、それには著名な庭の部分だけの解説や、その部分だけの図面では全く不十分である。

西澤文隆による実測図集は、こうした必要に迫る唯一の資料である。有名な庭の部分だけでなく、全体が描かれていること。それから、題名にもあるとおり、庭と建築がともに描かれていること。こうした図面は他に求められない。日本庭園は、庭と建築が一体のものとして造られている場合が多いが、どうしたものか、庭と建築がともに描かれた図面がない。西澤が自ら実測を始めた理由もそこにあるという。

なお、本書はA2判という大部な図集であり、折り込まれた図面を開くと15mもあるから、より見やすい小型の図集も併記した。ちなみに、最初に記した松が一本ある庭も、松とともにしっかり描き込まれている。

(建築・環境デザイン学科 准教授 温井亨)

「世界共和国へ」

― 資本ⅡネーションⅡ国家を超えて

●柄谷行人著

岩波新書

「世界共和国へ」という書名を見て、現実離れた空理空論、とあざ笑うのはたやすいところで、大学とは空理空論を学ぶ贅沢が許される場なのである。ひとたび浮世の荒波にのまれれば、不安定な労働者、ささやかな消

費者、退屈した視聴者として、夢も希望も見失いたちまち老いゆく。そうなる前に、世俗の瘴気を超えた「真空」の理論によって、現実を切り裂く眼力を鍛えておきたいものである。昨年出版された本書は、あとがきに「緊急かつ切実な問題にかかわっているから」「普通の読者が読んで理解できるようにしたものにした」とあるとおり、柄谷行人の著作としては最も平易な部類に属するであろう。とは言え、古今の学説を背景にした著者近年の思想を新書版に凝縮した一冊ゆえ、目まいがするほど中味は濃い。副題にあるとおり、著者は現代の世界を資本ⅡネーションⅡ国家が三位一体に結合したものと捉える。そして各々の成り立ちを、商品交換・互酬・再分配という特有の交換様式から解明する。その分析の鮮やかさは、出来事の山に埋もれた世界史の骨組みを、X線照射で透視するかのようである。

フランス革命の気高い理想「自由・平等・友愛」が、商品交換・再分配・互酬という資本主義国家の三つの交換様式の表れであると言われれば、目が覚める思いではなからうか。こうして、人類はどこから来て、今どこにいるのかを示してくれるだけでも驚嘆に値するが、本書の稀有な点は、どこへ行くべきかをもちきりと指摘している力強さにある。すなわち、前述の三つの交換様式に対抗する第四の「アソシエーション」を想定することによって、資本ⅡネーションⅡ国家の環を出る道が明示されるのである。この理念に基づいて柄谷行人が組織した実践運動(NAM)は内紛であえなく挫折したが、希望の原理としての説得力はいささかも損なわれていない。新書版の略述では物足りないというつわものには、「定本柄谷行人集」全五巻が入庫済みである。

(教養部講師 高田隆太)

●貸出ランキングから

平成十八年四月一日〜十二月三十一日まで
のランキングによる本学の読書事情をみてみましょう。上位三位までの他は、興味深いところをピックアップします。

第一位 Antarctica: no single country.
no single sea (Struk, 1979)

第二位 私の語るアートとデザイン
(東北芸術工科大学、二〇〇五年)

第三位 さくら図鑑
(中島千波/求竜堂、二〇〇二年)

接着力データブック
(日刊工業新聞社、二〇〇一年)

第六位 長屋迷路
(中里和人/ピエブックス、二〇〇四年)

第七位 がんばれ自炊くん!
(ほほ日刊イトイ新聞編/角川書店、二〇〇一年)

三位までの本は、昨年十回以上貸し出されました。三週間で返却されたとして毎月一回は貸し出されたことになりました。図書館で見つけられれば運がよいかもしれません。第三位の「接着力データブック」、接着力を扱う図書は他にも三冊ランクインしています。専門書は今すぐなければダメ、という状況になりがちですが、他にもあるかも、という探し方が有効だったのではないのでしょうか。昨年購入したのも複数ランクインしました。新着書架に鋭く目を配る学生諸君に頭が下がります。二〇〇五年十一月に刊行されたアートとデザインの「バイブル」、私の語るアートとデザイン」が、堂々二位にランクイン。こちらは複数所蔵しています。新人生及びまだ読んでいない学生諸君、ぜひお読みください。

Information

ガレリア・ノルド／スタジオ144／AVルーム

Galerie Nord

● 4/23(月)～5/2(水)
「曲げ木椅子」
(生産デ4年/佐藤陽子他)

● 5/14(月)～19(土)
「toughy (タフィー)」
(グラフィック4年/小笠原京香他)

● 5/21(月)～26(土)
「虫の視展」
(グラフィック4年/中敦郎他)

● 5/28(月)～6/2(土)
「グラフィック4年2人展」
(グラフィック4年/一條菜穂他)

● 6/4(月)～9(土)
「ひるのうら展」
(グラフィック3年/芝根今日子他)

● 6/11(月)～16(土)
「フニクラ」
(グラフィック3年/安部美穂他)

● 6/18(月)～23(土)
「趣味の広告展」
(グラフィック3年/須田隆幸他)

● 6/25(月)～30(土)
「今藤啓輔展」
(グラフィック4年/佐藤啓太他)

Studio144

● 4/18(水)～24(火)
「G展」
(グラフィック3年/山下文他)

● 5/9(水)～22(火)
「Mission 2007」
(プロダクトデザイン/渥美教授)

● 5/23(水)～29(火)
「ポエムアート展 1st stage
～つながり～」
(メディアコンテンツ2年/小南夢加他)

● 5/30(水)～6/5(火)
「タテキリズム 一立木写真展一」
(かもしか隊/新野恵理子他)

● 6/6(水)～12(火)
「P Time」
(生産デ4年/菅野裕香他)

● 6/13(水)～19(火)
「告白」
(日本画2年/松澤幸治他)

● 6/20(水)～26(火)
「しろろと写真展」
(環境デ3年/麻生合敬他)

● 6/27(水)～30(土)
「T-shirt design unit A
～部屋とTシャツと私～」
(メディアコンテンツ2年/福田亮佑他)

AVルーム

● 4/23(月)～28(土)
「白ア起点=ハクアキテン」
(映像2年/齊藤達也他)

Guide

「旅する絵画の紙片」

バルセロナのソフィア王妃芸術センターで、ピカソの『ゲルニカ』にはじめて対面した時のこと。ギャラリーには大勢の人がいたが、皆、絵と反対側の壁に張り付くようにして、できるだけ絵と距離をとって鑑賞していたのが印象的だった。巨大な画面の全体像を視界で隅々まで捉えるためには、およそ6mは画面から離れなければならない。人々は、安心した表情で、予備知識として事前に蓄えた『ゲルニカ』の図(イメージ)を確認していた。そこには、教科書通りの構図、反戦のメッセージを伝える様々な寓意が織り込まれている。手元のガイドブックには、丁寧な解説もついている。

だが、僕は一人、信号のタイミングを間違っただけで横断歩道を渡りはじめた人のように、見えない境界線を踏み越えて歩き出す。油絵の具の香りを嗅げるくらいキャンパスに近寄って、その力強い筆致と、黒い絵具の質感を眺める。この時、僕の目の前に存在するのは、画集どおりの「図」ではなく、人間パブロ・ピカソが引いた黒々とした線なのだ。そびえ立つ雄牛に圧倒され、暗い画面に灯る蠟燭の光を感じ、そして何より僕は、画家が絵筆で告発した猛々しい戦争のビジョンに包み込まれるようにして、一枚の太い木枠と、麻布と、絵具と、画家の腕の痕跡が、そこに確かに存在している重みを感じようとしていた。

図書館の画集で、美術館で販売されているポストカードで、僕たちは名画のイメージに慣れ親しんでいる。印刷物となって、手から手へ渡っていく無数の『ゲルニカ』。世に傑作と呼ばれる作品は、出会いの空間を限定されるオリジナルよりも、その作品を取りまくイメージやストーリーがひろく国境を越えて共有されていく。多くの人が、例えばルーヴルの『モナ・リザの微笑み』のオリジナルを観たとき、「本物はやっぱり違うよね」と、既に見知った『印刷物のモナ・リザ』との違いを表明せずにはいられない(よくよく考えてみれば、これは奇妙な発言だ。僕たちは、絵画そのものに、いったい何を見出しているのだろうか?)。

さて、ポストカードになって世の中を巡っているアート作品は、こうした『名画』だけではない。美術館でアシスタントをしていた頃、毎朝、学芸員宛に届けられる展覧会のポストカード(フライヤー)の量が驚いたものだ。毎日、呆れるほど沢山の展覧会が開催されていて、それを宣伝する一枚一枚に、大仰なタイトルや但し書きが張り付いている。発表する側にとって、それは当然の態度だ。このアーティストに理解のない国で、どんどん公立美術館から予算を削り、義務教育から情操教育を駆逐している国で、1年以上かけてゼイゼイと資金をかき集めて準備した発表の機会なのだから。

けれども現実には、送り手の淡い期待に反して、有力な美術館やギャラリーでは、コレクションされている作家の新作展などの重要な案内状以外は、ほとんどランプのカードを切るようにして一瞥され、ゴミ箱へ直行する。勿論、1枚1枚きち

んと眺めて、保管してあげたいが、そんなことをしていたら書類棚はすぐに一杯になってしまうのだ。

『ゲルニカ』のような名画であれ、無名の若手の意欲作であれ、また、それがオリジナルであれ印刷物であれ、美の価値は、様々な無意識レベルの情報の作用においてドライに分類され処理されていく。けれども、ふいに送りつけられた何の予備知識のないポストカード上の作品に、ごく稀にだが、無条件に心を惹かれることだってある。

紙面に自分を大きく見せようとする誇大広告の因子が感じられないもの。「まだ答えは出ていない。結論は固まっていない。それを決めるのはあなただ」とメッセージを送ってくるもの。実際にその展覧会に足を運ばなくても、壁にピンナップしているだけで、充分そのアーティストの恩恵を与え続けてくれるもの…。

デザインワークは重要だ。写真、タイポグラフィ、文字情報、紙質は洗練されていなければならない。だがそれ以上に、送り手のイメージの中で、一枚の紙片となった自身の作品が渡っていく街の風景や、受け取った人の心の動きなど、具体的な出会いのストーリーを描いていくことが大切だ。

心を打つアートとの出会いは、(どこかで読んだフレーズだけど)極めて起こり難いラブストーリーのように、デリケートにその瞬間を育てていく。膨大な情報の海の中かで生きる僕たちが、たった一枚の紙片を通して、偶然に「見知らぬ誰か」の瑞々しい感性と出会うことは、バルセロナでピカソと出会うことと同じくらい困難で、感動的な出来事なのだと思う。

(美術館大学構想室学芸員 宮本武典)

掲示板

●図書館二〇〇七年度年間予定

「世界に目を向けると、相もかわらず紛争と殺戮が繰り返されている。幸せを追い求めながら、憎しみ合い、殺し合う、人間の愚かさ。そして平和なはずの私達の日常においても、毎日のようにこども達が傷つけられる痛ましい事件が起きている。現代文明の姿を、この日本や世界の現状を、学生諸君の純粹な目でしっかりと見つめてほしい。何が美しくてなにか、何がほんとうでなにかが嘘か。人を愛するとはどういうことか。いかに生きるべきか……」

これは、本学の徳山詳直理事長が、繰り返し繰り返し発しているメッセージです。

私達は、この言葉の重みをしつかりと受けとめ、この大学に集う人々が真実を知り何かを感じ何かを考えるきっかけをつくるのが図書館の役割の一つであると考えました。そこで図書館では、テーマを決めて、そのテーマにそった本の紹介展示やドキュメンタリー映画の上映会を行うことになりました。

平成十九年度の年間テーマは「いのちを考える」です。この大きなテーマを元に、さらに二カ月ごとのテーマをつくり、内容を変えて実施します。

■図書企画展示の部

四月と五月のテーマは、「人として生きてゆくことを考える」です。

メイン展示は、「青春の本一〇〇選」。哲学系、心理学系、社会教育学系、文学、芸術系の図書を中心に、命の重さや生きることについて考える本や、学生時代だからこそ読んでほしい本等約一〇〇冊程度を展示します。展示本は、もちろん貸し出しも行います。学生のリクエストや教職員の推薦本等も追加展示しますので、展示状況は毎日変わります。

さらに、第二展示として、「一人ぼっちで

苦しまないで！—あなたの心を静かに癒し、時には激しく揺さぶる四十冊の本」と題して、悩みや悲しみでおしつぶされそうな時にこそ薦めたい本を紹介いたします。

また、第三展示は、新入生向けとして「大学生生活スタートアップ—大学生入門本三十選」。大学で学ぶとはどういうことか、自己発見、健康、自分の将来などに関して考える本を展示します。

■ドキュメンタリー上映会の部

テーマは「音楽とともに生きる」。山形ドキュメンタリー映画祭実行委員会との共催で、映画祭受賞作品を上映します。

四月二十六日(木) 午後五時半

「テキサス・テナー・イリノイ・ジャケー」
ストーリー—
アーサー・エルゴート監督、アメリカ／一九九一／八一分

イリノイ・ジャケーは、すばらしいジャズの伝統を受け継ぐ数少ないサクソフォン・ジャズ・プレイヤーのひとりだ。監督は、夢を追いかけるアメリカ人についての作品を作ったかっただけという。この作品の撮影は一九八八年から一九九〇年にかけて行なわれ、晩年のジャケーの日常生活や公演の様子を切り取る。また、ライオネル・ハンプトン、デイジー・ガレスピー、ソニー・ロリンズなどのジャズの巨人たちが人となり語るシーンも見逃せない。これはシンプルな音楽の映画である。

五月三十一日(木) 午後五時半

「アンダーグラウンド・オーケストラ」
(99審査員特別賞)
エディ・ホニグマン監督、オランダ／一九九七／一五五分

パリの音楽家たち。彼らは地下鉄で、街角で、思い思いの楽器を演奏し糧を得ている。多くは政治亡命者であり不法移民である彼らの過酷な現実と、クラシックからシャンソン、R&Bなど演奏される音楽の素晴らしさ。「こ

の映画はおもに地下で撮影するはずだった。パリの地下鉄駅の構内で、あるいは運行中の列車のなかで、世界各地からやってきた音楽家たちと出会うはずだった。しかし、地下鉄での撮影許可がとうとう降りなかったため、撮影は秘密裏にすすめた。気がついたら地上に追放されていた。しかし、アンダーグラウンドな気分はそのままだった」と語るホニグマン監督の、彼らを見つめる目の暖かさが印象的な作品。

この後も、六月〜七月は「地球のいのちを考える」、十月〜十一月は、「戦争と平和と芸術について考える」というテーマで、企画を進めていきます。これからの展開を楽しみに、ぜひ図書館に足を運んでみて下さい。
(図書館職員 谷川佳代子)

●WEBサービスで

所蔵リクエストを出そう。

図書館のスタッフは、皆さんの四年間の学生生活の彩りの一つに、良書との出会いを加えて欲しいと考えています。そのため、選書にあたっては「読んで欲しい本」はもちろんのこと、皆さんが「読みたい本」も沢山揃えていきたいと思っています。

スタッフとは世代がかなり異なる皆さんの「読みたい本」を知るには、カウンターでのやり取りや図書館での作業を手伝っていただいたときの会話などが大変貴重なのですが、やはり一番は、「所蔵リクエスト」。直接皆さんの要求を知ることができて大変助かっています。具体的に読んでみたい本がある方は、是非リクエストを出してみてください。毎年、沢山の所蔵リクエストを頂いていますが、その内容の多彩さには、毎回驚きや感嘆の声が出てしまうほどです。芸術とデザインに関わるといことが、図書館においては単に芸術とデザインの本を集めればよいのではない、ということが実感できるのです。
所蔵リクエストの申し込みには、所定の用

紙に記入して提出する方法のほかに、蔵書検索の画面に設けられている「WEBサービス」を使う方法があります。インターネットで申し込みをしますので、図書館に足を運ばなくても、図書館が開いていなくても、いつでもどこからでも申し込みができます。また、申し込みの履歴も随時確認することができ、時間を節約したい方、窓口で書類を書くのが億劫だという方も本当に簡単に申し込みができるので、ぜひ一度お試しください。

●蔵書点検を実施しました。

二月二十六日〜三月三日、蔵書点検を実施しました。蔵書点検の最大の目的は、図書台帳に登録されている蔵書がまちがいでなく所蔵されているかどうかを調べる、棚卸し作業です。

この作業によって、あるべき位置にない資料が浮き出てきます。そのうちの、棚の後ろに落ちていたり、他の資料に挟み込まれていたり、返却場所が誤っていたり……という、館内にあるのに利用できなかった資料はこの機会に全て所定の位置に戻りました。

また、購読雑誌のバックナンバーの整理も行いました。平成十八年十二月までに発行された雑誌は、全て第二閲覧室のバックナンバーコーナーに移動しました。バックナンバーコーナーは取蔵場所がかなり窮屈になり、従来の五十音順では納まりきれないため、製本の有無、大きさ、おおよかなジャンルなどにより配置を大幅に変更しました。二年生以上の皆さんは、探しく感じるかと思いますが、処分せずに管理するための手段としてご理解ください。場所がわからない図書・雑誌については、お気軽にスタッフにお問い合わせください。
今回も、学生の皆さんに作業をお手伝いいただきました。単純で根気の要る作業でしたが、各自気になる本や雑誌、メディアなど、お宝を発見できたようです。有難うございました。